

臨時増刊号 No4

みなさまへ元気を!!



[事務局] 〒648-0094
橋本市三石台4-1-15
TEL 0736-38-3669
FAX 0736-38-3680
発行 學塾・中之島事務局

「特集」コロナ禍にうち勝とう!!

「未だかつてあらず」

近藤 宏枝

「現し世が どんな悲境に 沈みても 季節は移ろい 咲く山桜」 未曾有のコロナ禍で、様々な予定がキャンセルとなり始めたこの春に詠んだ拙歌です。各自自治体で対応が少しずつ違っている為、県や市のHPを確認しながらの生活を、続けていることと思います。私の住む愛媛県四国中央市では、三月に入つて市内の小中学校が春休みまで休校となり、また夏休みも短縮となりました。子供達は不安を抱えながら、長い休みでも何処にも行けず、友達にも会えず、暑さに耐えながらマスクで登校する姿が痛々しく思えました。私達が続けてきた学校のトイレ掃除も、六月になってやっと、少人数で短い時間ならばと許可がおりました。図書館を使用している読書会は、五月は休止となりましたが、規制はあるものの今は開くことが出ています。けれども中には、参加を怖がっている方も、ご年配にいらつしやいます。このように学びの場が制限され、自由に行き来をして会うことが、ままならなくなっているのも事実です。ご承知のように「人間学塾・中之島」も、今までのように皆が集い、語り合い、学びあえる場を中断せざるを得ませんでした。けれども私達は色々な方法で出会うことが出来ます。インターネットとう便利な情報を使うと、遠くに居ながらも会話をし、学びの場を得ることも出来るようになったのです。そして何より「はがき」という手段を忘れてはなりません。森信三先生は「たった一枚のハガキで、しかもたった一言のコトバで、人を慰めたり励ましたり出来るとしたら、世にこれほど意義あることは少ないとも言えましよう」とお教え下さいました。会えない時間は、それぞれが今までの学びから、自分の住

む場所です成すべき「実践」を考える良い機会だと思っています。私は「中之島」で皆さんにお会いして、お話を伺える日を楽しみに待っているのです。

「こんな時にこそ」最善観で

福本浩之

暦の上では秋になりましたが残暑が厳しいですね。皆さまいかがお過ごしでしょうか。連日の暑さの中心マスクを着けていると息苦しくて、つい「早くコロナ前の状態に戻ればいいのに」と思っています。先日ダライ・ラマ氏の『般若心経入門』という本を読みました。仏教の主な目的は「苦からの解放」なのですが、いくつかの「苦」の中に「変化の苦しみ」というものがあると書かれていました。世の中や人生は常に移ろいゆくのが当たり前なのに、その時々状態が変化することを「苦」に感じるのは煩惱のなせる業であつて、自ら苦しみの元を作り出していることに他ならないのだそうです。これは森信三先生のいう「最善観」にも通ずることだと思ひます。眼前の状況がどうであれ、それを良いと捉えるか悪いと捉えるかは自分の心の持ち方次第であり、起こっている事態(ウィズ・コロナの今)を自分にとつての最善の試練だと受け止めて前向きに対処してゆきたいと思ひます。9月に塾が再開されて皆さんにお会いするのがとても楽しみです。しかしながら、大切な仲間の中からコロナウィルスの犠牲者を出すわけにはいきません。開催にあたっては出来る対処に最善をつくすとともに、冷静で客観的な判断を心掛け、場合によってはたとえ開催日の直前であっても中止する勇氣が必要だと思っています。第9期は計画通りの塾運営が難しいかと思ひますが、状況をお察しの上、ご協力の程お願い申し上げます。

《大悟徹底》

寺田一清先生寄稿録



天分塾の一日研修の最後に、毎回唱和する「三つの誓い」、
「一つでいい 一つが いい 小さな一つをややつづけよう」と始まり、「行持」「心願」「結実」の三熟語で終わる唱和を、わたくし自身唱えるたびに、少しはわたくしの全細胞の一つ一つに染みこませたく、覚悟を新たにしております。が、果たして、小さな実践をわたくし自身どれほど出来るおりましたでしょうか。

今一つ、わたくし自身の「日常実践の五ヶ条」として、「あ・す・こ・そ・は」をかねてより名刺の裏にも記載し、自戒の一端として披露しておりますが、果たしてどれほどの承認が期待できましようか、甚だあやしいものです。このたび名刺を新しく印刷する必要に迫られて、その唱和を少し考え直してみました。

- あ・・・あかるいあいさつ 人より先に
- す・・・すまいるステキ 而今ニコニコ
- こ・・・こしほね立てて 一点集中
- そ・・・そうじひたすら こころを磨く
- は・・・はがきのご縁 しあわせ招く

この五ヶ条の内、やっと合格点がかつたつただけなのは、いかほどございませうか。どうもおぼつかないものです。とりわけお掃除については、鍵山先生にご縁を頂いてちようど二〇年目を迎えますが、甚だお恥ずかしい次第です。

今朝方も「暗い夢を見続けて…」はつと眼が覚めましたが、整理整頓の行き届いてない、家庭・食堂・職場・学校寮内の悪夢に目覚めました。大いに反省し、身辺整理に取りかかったところ、貴重な書類を発見しました次第で、夢を通して気づきを授かった思いがいたしました。

「尊徳翁の実践知」

中桐万里子先生



■名を残さず行いを残せ

二宮尊徳といえど、薪を背負って本を読んでいる少年像が馴染みだと思えます。この像から

でしようが、私が幼いときから家族の者から、この像で大切なのは、本を読んでいることではなく、「一步を踏み出している足」であると言ひ聞かされてきました。

学ぶことはもちろん大切であるのに、あえてそれ以上になぜ足が大切なのか？それは私たちが行動・実践をするため。つまり「どんなときでも諦めず、くじけず一歩前に足を踏み出し続けよう」と繰り返して聞かされてきたのです。金次郎のこの像は決して「勤勉」の像ではなく、働くこと、行動することを示す「勤労」の像なのです。

家族が繰り返してそのことを伝え、「頭だけの人間になってはいけない」と私たちに戒めてきたのには、金次郎が遺した遺言に関係しています。

金次郎が弟子に残した最後の言葉は「名を残さず行いを残せ」。子孫であれど、名前など忘れてくれなかまわぬ、墓石にも名前を刻むな。残してほしいもの、それは「あなたたちの行動である」。あなたたちの行動、実践を続けることで未来を切り拓いてほしい、一步を踏み出すことをやめないでほしい。それが実践主義者、行動主義者、現場主義者としての金次郎の思いだったのです。

金次郎の実践とは農業です。農家に生まれ農業に捧げた一生でした。金次郎の生きた時代は、歴史的異常気象に見舞われた幕末の時代、社会が混乱を極めた時代でした。金次郎がなにより幸せのために必要としたのは経済です。つまりは、目の前の田畑をどんなときでも実らせ、経済の収益を必ず手に暮ら

すということ。そのためにこそ徹底して実践にこだわったのでした。米が実らず飢饉にあえいでいる時代に、金次郎が再建させた村の数は六百、いかに行動主義者であるかがわかりましよう。

■相手に半分従い半分逆らう

なぜ金次郎が六百もの村を救えたのか、それは誰もが金次郎のように行動できるように、彼が「行動の極意」を語ったからです。

農作業の道具である「水車」から、金次郎は理想的な共存共栄の関係を見出します。水車と川は全く違う個性で、全く違う方向性を持ち、そして互いに互いを生かしあうて動いています。互いに無理なく新たなエネルギーを生み出しているのです。自分を「水車」だと思い、「相手（人間、環境、自然等の課題）」を川とすると、必ずしなければならぬのは「まずは川に飛び込むこと」。ただし飛び込んだだけでは溺れてしまう。飛び込み、そこから這い出してくることが重要だと金次郎は言います。さらに、水車の上部に注目すれば、そこは川と反対方向に動いていることもまた重要であると。「相手に半分従い、半分逆らう」との言葉で、このバランスこそが実践の極意であると言うのです。具体的にどういうことか、それは「相手をよく知る」「よく見る」「覚悟する」ということ。しかし、これはゴールではなく、相手に逆らうためにすることに過ぎない。

ただし、この逆らうとは、戦うことではなく、手を受け入れ、対策を立てることなのです。金次郎が大好きだった言葉は「工夫をする」。相手に翻弄される動物たちと違い、人は工夫ができるからこそ、いかなるときも実り（幸せ）に向かうことができるというわけです。しかし、対策も工夫も頭の中にあるだけでは力はなく、声に出し、行動し形にするこ

■積小為大

農民にとって作物はそのまま経済です。しかし、田から生まれるものは経済だけではない、汗をかき労働を通して、人と人との助け合いの絆が生まれ、人と自然とのコラボレーションが生まれます。「宝」の語源は「田から」。実は宝物はすべて日常生活の中から生まれるのです。

金次郎の言葉「積小為大」は、日常の小さなものにアンテナを張るという、知ることの極意であります。知ることは、自分を楽にする作業です。なぜなら理不尽な現実や相手に毒づくとき、それは自分を傷つける行為そのものの、しかし問題を知れば思わぬアイデアや、また仲間との出会いもある。楽になる。飛び込むからこそ、水車の回転は始まるのです。問題が解決できないのは能力などの「力」がないからではない、それは「無知」ということが起こっているだけです。現実を知らないから道が見えてこないだけであり、困ったことが起こったときこそ、現場に戻り、知ることが重要です。知るとは、知識を蓄えるということではなく、自分の目と感覚と経験で現場や相手を見ること。

金次郎は暦から季節を知ろうとはしませんでした。あくまでも、自分の感覚を大切にし、常識には縛られなかった。よく見ることはプロセスを知ることです。この世のすべてのこと、もの、出来事はプロセスを持っており、それはメッセージとなる、と金次郎は言います。よく見ることで受け取るメッセージからは、新たなエネルギーがわいてくる。それが私たちにとって明日への一步となるのではないのでしょうか。

(抄録 中川千都子)

